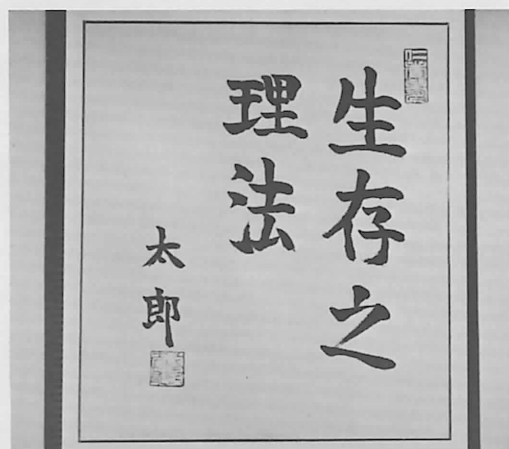


# 生存科学研究所

## ニュース

Vol.3. No.5.

1988.9.10発行



### 目次

- |                         |    |                             |    |
|-------------------------|----|-----------------------------|----|
| ● 巻頭言                   | 1  | ● 第5回武見フェロー報告「武見国際保健講座を終えて」 | 20 |
| ● 第3回武見国際シンポジウム特集       | 2  | ● 維持会員だより                   | 21 |
| —シンポジウムの概要              | 2  | ● ニュース・オブ・ニュース              | 22 |
| —シンポジウムこぼれ話             | 15 | ● 公益信託武見記念生存科学研究基金ニュース      | 23 |
| ● 「科学と人間」の会議—科学技術と人間の問題 | 18 | ● ハーバード大学公衆衛生大学院武見講座だより     | 24 |
| ● 生存の質シリーズII            | 18 | ● 第41回生存科学研究会のお知らせ          | 25 |
| —発展途上国の環境問題を通して考える生存と生活 |    | ● 広島講演会のお知らせ                | 25 |
| ● 生存科学ビューポイント           | 19 | ● 編集後記                      | 25 |

発行：財団法人 生存科学研究所

〒104 東京都中央区銀座4-5-1

聖書館ビル303

電話 03-563-3518

## 武見シンポジウムと開発途上国援助

内外政策研究会会長・第3回武見国際シンポジウム組織委員長 大来佐武郎

武見太郎先生との出会いは終戦後間もない頃だったと思う。当時、私は外務省調査局で戦後日本経済再建問題に取り組み、著名な経済学者による研究会の書記を務め、有澤広己、中山伊知郎、東畑精一などの諸先生のお手伝いをした。また私がもともと電気工学の出身だった縁もあって、茅誠司、内田俊一、堀義路などの諸先生による戦後の科学技術政策立案の仕事もお手伝いした。さらにこのような関係で昭和21年の夏頃から、上記の人々をメンバーとする吉田茂首相の昼食会の書記を務めた。吉田首相を含め、この顔ぶれはいずれも武見先生との縁が深く、私も間接的なつながりであったが、時折、武見先生にお目にかかる機会があった。また、国際文化会館での医療政策についての勉強会に講師として招かれ、先生も熱心に聞いておられた。

一昨年（昭和61年）の5月、第2回武見国際シンポジウムがハーバード大学で開かれた際には、武見敬三さんの依頼で報告者の一人として出席した。本年7月東京で開かれた第3回武見国際シンポジウムについては組織委員長就任の依頼を受けたが、今回のテーマが「開発途上国への国際保健医療協力」であり、私も長年開発問題と取り組んできた関係もあって喜んでお引き受けすることにした。

1988年度の政府予算によると日本のODA（政府開発援助）は100億ドルに達し、米国のODA予算90億ドルを上回り、日本は世界一の援助大国になる。これは近年の急激な円高に

よることもあるが、政府予算で毎年援助費を増額してきたことにもよる。米国内には、日本が経済大国になったにもかかわらず、国際的な負担や責任を引き受けようとしなくて、ただのり（フリーライド）をしているという批判が根強い。防衛費の負担が、米国のGNP比6.5%に比べて、日本の1%は低すぎるという批判がこれまで強かったが、GNPが大きくなったために日本の防衛費の絶対額はすでにヨーロッパの主要国の英、独、仏と肩を並べるようになってきているので、日本はむしろ開発途上国援助を思い切って増やすべきだという意見が強まっている。GNPに対する援助費は昨年で0.31%程度で、国連の目標（GNPの0.7%）に比べても、OECD諸国の平均（0.35%）に比べてもまだ低い。竹下首相も「世界に貢献する日本」のスローガンを掲げ、途上国援助の増加を打ち出している。

問題はいかにして援助を途上国の発展のために有効に役立てるかということである。これまで日本は経済協力と技術協力の二本の柱で援助を進めてきたが、これからは研究協力という第3の柱を立てて、途上国の研究能力を高めていくことも重要になっている。昨年の暮れに「開発のための保健研究」を検討する国際委員会が発足し、私も13人の委員の一人を務めているが、日本の医学界も貧しい国々の地についた研究能力向上に協力すべきであろう。

## ●特集

# 第3回武見国際シンポジウム

## シンポジウムの概要

日程：7月1・2日 国際シンポジウム（招待者による） 於 東京大学 山上会館

7月3日 一般公開講演会 於 国際研究交流会館

7月4・5日 ポスト・コンGRESS・ツアー 第1回武見講座リユニオン・ツアー岩手への旅行

### 1. はじめに

第3回の「武見国際シンポジウム」は、昭和63年7月1日から3日の3日間にわたって、東京で開催された。このシンポジウムが、日本で開催されるのは、昭和59年に続いて2回目であるが、今回のシンポジウムは次の点で特徴があった。

第1は、テーマに選んだ「開発途上国への国際保健医療協力」が、誠に時期を得たものであったことである。最近、日本政府は開発途上国援助（いわゆるODA）を今後2倍の500億ドル以上に増加していくことを発表している。この中で医療協力の費用は、かなりの割合を占め、医療に携わるものとしても、この医療協力の問題は無関心ではいられない。また、本年7月には、日本の中嶋宏先生が世界保健機構の事務局長に就任された。このような理由から、最近国際医療協力に対する関心が非常に高まっていたのである。

第2は、5年前に始まった武見フェローが数十人に達し、世界中で活躍しはじめており、このシンポジウムにはその中のかなりの人々が参加したことである。これは武見先生がハーバード大学に武見講座を開設された時に構想されたことが実を結びつつあることを意味している。

以下にその概要を紹介する。

### 2. 武見国際シンポジウム

武見国際シンポジウムについては、今更解説を必要としないとは思いますが、簡単にその経緯を振り返ってみるとつぎのようになる。

このシンポジウムは、(財)生存科学研究所とハーバード大学武見プログラムが共催するもので、第1回は昭和59年5月に東京で開催され、テーマとして、「21世紀の国際保健問題—国境を越えた保健問題」を掲げて行われた。その後は、場所を日米交替で2年に1回行なわれることになっており、第2回は、昭和61年5月ボストンで、「Health Nutrition and Economic Adjustment」と題して開催された。この第3回のシンポジウムはこれに続いて行なわれたものである。

今回はテーマとして、国際保健医療協力の問題を取りあげたが、後に述べるように、日米の大学関係者、日米の援助機関、医療に関連する国際機関、開発途上国の人々が一堂に会して議論したところに今回のシンポジウムの特徴があった。

このような立場の異なる人々がそれぞれの立場を越えて自由に討議できたのも、大来佐武郎氏を委員長とする強力な組織委員会があったからである。また、これを助けて実際の準備をすすめたのは開原成允東大教授（生存科学研究所理事）を委員長とする実行委員会であった。それぞれの委員会委員および事務局は別表の人々であった。

### 3. シンポジウムの概要

シンポジウムは3日にわたって行なわれたが、最初の2日は、招待者のみのシンポジウムであった。

#### 1) 第1日—世界の現状の把握

第1日の午前中に行なわれた開会式は、大来委員長の開会宣言に続いて、生存科学研究所を代表して、山村雄一顧問が挨拶された。また共催の1つであるハーバード大学公衆衛生大学院武見プログラムを代表して、武見Professorである Lincoln Chen 教授が挨拶した。いずれも、この国際シンポジウムがここまで発展してきたことを祝った。その後、科学技術庁と厚生省の挨拶があり、開会式を終わった。

続いて第1のセッションに入り、ここでは、「開発途上国における健康状態の変化」と題して開原成允教授（東京大学）の司会で、3つの講演が行なわれた。最初は、有名な人口学者である John Caldwell 教授（オーストラリア）が、人口学の立場から世界中で起こっている傾向をまとめた。即ち、平均寿命も世界的にみても延長する傾向にあるが、その世界の趨勢に追いついていけない国のあることを述べ、これらの国々を同じ水準にするには、医療のみではなく、教育など医療以外の活動が必要であるとした。特に女性への教育の重要性を訴えたのが印象的であった。

これを受けて、次にそれぞれの国の保健医療関係の施設や組織がどのように変わってきているかが議論された。ここでは、開発途上国の立場から、タイ国保健省の Prakrom 氏はタイにおける状況を多くのスライドを見せながら話した。次いで先進国の立場で、結核研究所名誉所長の島尾忠男博士が、日本には結核の研究・研修施設があり、これまで世界に貢献してきたが、日本に結核が少なくなると共にそれに対する関心が薄れ、その維持が困難になることが考えられることを訴えた。日本の医療もこれからは、日本の国内のことのみを考えるのではなく、世界中のことを考えて医療を行っていく必要があることを示し、大きな感銘を与えた。

第1日の午後は、「国際医療協力の評価」と題して、Reich 助教授（ハーバード大学）の司会で、韓国、スリランカ、日本、タンザニア、インド（たばこ）、イスラエル（マラリア）、米国（AIDS）、インド（ハンセン氏病）などにおける国際協力の例が語られた。この中で聴衆に強い印象を与えたのは、スリランカの Samarasinghe 氏の講演で、医療協力が予防医学ではなく、治療医学に傾きがちであること、開発途上国からの要請によって援助を行うことが必ずしも有効に働かないこと、援助がいわゆる「ひもつき援助（tied aids）」になりがちなこと、などを指摘した。今後の方向としては、開発途上国自体に問題解決の力をつけさせる方向に援助を使っていくことが必要であること、そのためには、医療協力の専門的な研究をもっと行う必要があることなどを述べた。

このあとの Ramalingaswami 博士のコメントは、国際医療協力の明るい面と暗い面を列挙

してみせ、誠に印象深いものであった。そこには、博士の長い経験がにじみでていた。

## 2) 第2日—国際保健医療協力の課題

第2日目の午前は、「国際医療協力の現状」と題して、筑井甚吉教授(大阪大学)の司会で、5つの講演があった。WHOにおいて、今は引退したLee Howard博士は、世界中の国際医療援助の実態を詳しい統計を基に講演した。世界中の医療援助に使われる資金は、確かに年々増加している。このため、今は前に比べ少し状況が改善されてきている。しかし、それだけに国際医療協力の質が問われているといえる。

各国の開発途上国援助の中で医療協力のプロジェクトの占める比重は国によって異なっているが、いずれの国においても医療協力が重要な部分を占めていることは間違いない。次いで、国立医療センターの我妻氏は、医療協力をする立場から、その問題点を率直に述べ、大きな共感を持って迎えられた。これらの講演に対し、大瀬氏がアフリカの経験を述べてコメントした。米国のRussell Morgan氏は、米国の国際医療協力協会のような団体の会長であり、米国の医療援助の実態を踏まえて、先進国同士がこの問題で協力しあうことの必要性を訴えた。Morgan氏の言葉を借りれば、North-North Allianceである。

この他、Abed氏はバングラデシュの大きなNGOについての経験を述べ、こうした組織の役割を示した。星野氏は民間のボランティア活動の経験を、また、中根千枝氏は社会人類学的な観点から意見を述べた。

第2日目の午後は、最後の締め括りとして、Chen教授(ハーバード大学)の司会で、「Priorities and Opportunities」と題するパネルが開かれ、国際保健医療協力の政策的な課題が話し合われた。まず、国際機関の立場で、中嶋宏氏は国際協力の必要性を訴えた。次いで、米国の援助機関であるUSAIDを代表して、Bloch女史、日本の援助機関からは、JICAの近藤藤田部長の2人が、2国間援助と多国間援助の問題を論じた。また、Evans教授は、ロックフェラー財団の経験を踏まえ、民間の組織の国際協力への関与について意見を述べた。

最後は、大来組織委員長が総括講演を行ない、次いでハーバード大学のBell教授がこれまでの発表をまとめた。最後は土屋健三郎産業医科大学学長(生存研究所理事)が閉会の言葉を格調高く述べて、このシンポジウムの幕を閉じた。

## 3) 一般公開講演会

第3日目は、これらの成果を一般の人々に理解してもらうために、国立がんセンター内の国際研究交流会館で公開シンポジウムが開催された。ここでは、中嶋宏WHO次期事務局長の基調講演の後に、司会開原成允東京大学教授で、Lincoln Chen教授、蟻田功熊本病院長、金子義徳東邦大学名誉教授、Smarasinghe教授(スリランカ)、大熊由紀子朝日新聞論説委員などがパネル討論会の中で意見を述べた。最初にハーバード大学のLincoln Chen教授がなぜ国際医療協力が必要なのかを述べ、その理由として第1に人道的な観点、第2に、医療協力によって世界の緊張状態の緩和が可能となり、ひいては世界平和への貢献になることをあげた。蟻田博士は長くWHOにあって天然痘の撲滅につくされた経験から、また金子博士もフィリピンの熱帯医学研究所を設立

し運営した経験から国際協力の必要性を訴え、Samarasinghe教授が日本の医療協力の問題点と将来への期待を述べた。最後に大熊由紀子氏が市民の立場からその医療の国際協力の意義をまとめて、パネルを締め括った。

#### 4. 今回のシンポジウムの意義

最近、国際協力の必要性が医学界の多くの場面で議論されるようになったが、その国際協力を正面からとりあげて、その意義や問題点を議論するような場はこれまで意外に少なかった。また、国際医療協力を実践する人々も多くなってはきたが、留学生の受入れ、学術交流、開発途上国への医療協力、ボランティア活動などがそれぞれの立場から行なわれており、それらの人々が一堂に会することも少なかった。この意味では、今回のシンポジウムは、これらが学問的に議論された初めての場といってもよいかも知れない。ここでは多くのことが議論され、これを一言でまとめることは難しい。しかし、あえて最も重要なことをあげるとすれば、国際医療協力の中心となる人や施設を今後日本でも充実していかなければならないということであろう。勿論、医療協力は日本の医学界をあげて行うものであるが、日常の診療や研究に忙しくしている人々に片手間に医療協力に伴う医療以外の雑事まで依頼することはできない。ここで、あえて「雑事」と書いたが、国際協力の場合は、この「雑事」も高い専門性と学問的な基盤を必要とし、これが医療協力そのものの成否を左右する場合さえある。国際協力をする医科大学や病院などに、数は少なくともこのような役割を担う国際保健の専門家を育てていくことが重要であろう。

#### 5. 懇親会

参加者全員による懇親会は、第1日の夕方に会場の山上会館で行なわれた。司会は武見敬三先生が受持ち、和かに懇親会が進行した。この懇親会には、伊藤科学技術庁長官が出席され、武見太郎先生の思い出を話されたのが、印象的であった。この他には、組織委員会を代表して大来委員長が、また生存科学研究所を代表して熊谷副理事長が、またハーバード大学を代表して Reich 博士が挨拶された。乾杯は、前国際協力事業団副総裁の牟田口道夫氏の音頭で行なわれた。

組織委員の方々も殆どすべての方が出席され、多彩なメンバーによる懇談が遅くまで続いていた。

講演者・組織委員および生存科学研究所関係者による懇親会は、2日目の夕方に生存科学研究所で行なわれた。ふだんは会議に使われる部屋に、生存科学研究所のスタッフの人々の努力で御馳走が並べられ、生存科学研究所主催の会にふさわしい懇親会になった。出席した人々の中には、生存科学研究所の名前は知っていても、来所するのは初めてという人も多く、武見太郎先生のゆかりのオフィスを目のあたりにして感懐を新たにした。

#### 6. プロシーディング

このシンポジウムの記録は、米国の出版社から英文で、1989年内に出版される予定である。

## 組織委員会・実行委員会名簿

### 組織委員会

(五十音順 敬称略)

委員長 大来佐武郎  
 委員 蟻田 功  
 飯沢 省三  
 飯村 豊  
 岩井 誠三  
 大西 孝夫  
 織田 敏次  
 開原 成允  
 紀伊国献三  
 岸 薫夫  
 行天 良雄  
 小西新兵衛  
 島尾 忠男  
 Mario Taguiwaro  
 S. Tapa  
 Lincoln C. Chen  
 筑井 甚吉  
 土屋健三郎  
 津山 直一  
 中嶋 宏  
 Harvey V. Fineberg  
 三島 濟一  
 武者小路公秀  
 牟田口道夫

元外務大臣・国際大学総長  
 国立熊本病院院長  
 文部省学術国際局国際企画課長  
 外務省経済協力局技術協力課長  
 神戸大学医学部教授  
 厚生省大臣官房国際課長  
 国立病院医療センター院長  
 東京大学医学部教授 (実行委員長)  
 筑波大学社会医学系教授  
 国際協力事業団副総裁  
 NHK解説委員  
 武田薬品工業株式会社  
 結核研究所名誉所長  
 フィリピン国厚生次官  
 トンガ国厚生大臣  
 ハーバード大学公衆衛生大学院武見記念教授  
 大阪大学社会経済研究所教授  
 産業医科大学学長  
 国立リハビリ・センター総長  
 WHO西太平洋地域事務局長  
 ハーバード大学公衆衛生大学院学部長  
 日本医師会副会長  
 国連大学副学長  
 前国際協力事業団副総裁

### 実行委員会

委員長 開原 成允  
 委員 青木 清  
 漆 博雄  
 北林 春美  
 武田 裕  
 武見 敬三  
 田中 慶司  
 藤崎 清道  
 藤井 充  
 丸井 英二  
 M. R. Reich  
 我妻 堯  
 事務局 長瀬 淑子

東京大学医学部教授  
 上智大学教授  
 上智大学経済学部専任講師  
 ハーバード大学公衆衛生大学院卒  
 大阪大学医学部助教授  
 東海大学政治経済学部助教授  
 岩手県庁環境保健部長 (第1回武見フェロー)  
 厚生省大臣官房国際課課長補佐  
 福岡県衛生部保健対策課長 (第2回武見フェロー)  
 東京大学医学部講師 (第3回武見フェロー)  
 ハーバード大学公衆衛生大学院Takemi講座事務局長  
 国立病院医療センター国際医療協力部長  
 東京大学医学部付属病院職員

# プ ロ グ ラ ム

7月1日(金)

- 9:00- 開会式 大来佐武郎 (組織委員会委員長)  
Lincoln C. Chen (Takemi Professor in International Health, Harvard School  
of Public Health)  
伊藤宗一郎 (科学技術庁長官)  
藤本孝雄 (厚生大臣)
- 9:30- Session I. The Changing Health Situation in Developing Countries (司会：開原成允)  
A. The Changing Health Conditions :  
“Changing Health Conditions” John and Pat Caldwell (Australia)
- 10:30- Coffee break
- 11:00- B. Changing Institutional Capacity in Developing Countries to deal with health problems :  
- “Changing Institutional Capacity in Developing Countries to Deal with Health Problems”  
Prakrom Vuthipongse (Thailand)  
- “Changing Institutional Capacity for Developing Countries Taking Tuberculosis as an  
Example” 島尾忠男 (日本)
- 12:30- 昼食
- 13:30- Session II. The Evolution of International Cooperation in Health,  
Case studies : (司会：Michael R. Reich)  
A. Country studies :  
- “Role of International Cooperation : An Approach to Developing Primary Health Care in  
Korea” Ha-cheong Yeon (Korea)  
- “From CT Scans to Malatheaon : Japanese and US Assistance to the Health Sector of Sri  
Lanka” S. W. R. de A. Samarasinghe (Sri Lanka)  
- “Japan’s Experience with Public Health Reform in the Early Occupation Days : For-  
eigner’s Plans and Indigenous Systems” 丸井英二 (日本)  
- “The Role and Impact of Foreign Aid in Tanzania’s Health Development”  
Eustace P. Y. Muhondwa (Tanzania)
- 15:00- 休憩
- 15:30- B. Disease studies :  
- “International Cooperation in Tobacco and Health with Special Reference to Developing  
Countries” Prakash Gupta (India)  
- “Local and External Resources in the Control of Tropical Infectious Diseases” Uriel  
Kitron (Israel)  
- “AIDS and Ethnomedicine in Africa : Toward a Strategy of International Cooperation for  
Disease Management” Charles Good (USA)  
- “Leprosy Control in India : International Cooperation and the Role of Takemi Philoso-  
phy” Emmanuel Max (India)  
Commentator : V. Ramalingaswami (UNICEF) 岩井誠三 (日本)
- 総合討論



7月2日(土)

9:00- Session III. Present Status of International Cooperation in Health

(司会：筑井甚吉)

A. Evolution of foreign assistance in health : bilateral and multilateral assistance.

- “The Evolution of International Cooperation for Health in Developing Countries : Bilateral and Multilateral” Lee Howard (former PAHO)

- “Department of International Cooperation and Its Future Role in Japan’s Development Assistance” 我妻 堯 (国立医療センター国際医療協力部長)

Commentator : 大瀬貴光 (日本)

10:15- 休憩

10:30- B. Nongovernment organization in international health cooperation.

- “Role of NGO : the US Perspective” Russell Morgan (NCIH-United States)

- “Role of NGOs in International Health Development” F. H. Abed (BRAC-Bangladesh)

- “Two Approaches of International Cooperation” 星野昌子 (日本ボランティアセンター)

11:45- C. Learning in both directions : International health cooperation from an anthropological perspective. 中根千枝 (日本)

総合討論

12:30- 昼食

13:30- Session IV. The Future of International Cooperation for Health

A. Priorities and Opportunities : Panel (司会 : Lincoln Chen (Harvard) )

- “Priorities and Opportunities for International Cooperation for Health : Experiences in the Western Pacific” 中嶋宏 (WHO)

- “Priorities and Opportunities for International Cooperation for Health : the USAID Perspective” Julia Chang Bloch (USAID)

- “International Cooperation in Health Research” John Evans (Rockefeller, CHRD)

- “Future Perspective of International Health and Medical Cooperation : the JICA perspective” 近藤 健文 (国際協力事業団)

16:00- B. Strategies for Foreign Assistance in Health

David E. Bell (Harvard)

大来佐武郎 (日本)

閉会の辞 : 土屋健三郎 (生存科学研究所)

## 講演者の横顔

John C. Caldwell (オーストラリア)

オーストラリア国立大学 人口学部長 教授、ナイジェリアのイバダン大学、スリランカのコロンボ大学、米国のインディアナ大学などでも教鞭をとる。国際人口学の世界的な権威である。

Prakrom Vuthipongse (タイ国)

タイ厚生省保健医療局長 (Chief Medical Officer)。タイの Siriraj 大学医学部卒業後、Mahidol 大学で MPH 取得。その後、Minnesota 大学、Johns Hopkins 大学等に学ぶ。医療計画の専門家。

島尾忠男 (日本)

結核予防会結核研究所名誉所長。WHO 理事会副会長。東京大学医学部卒業。結核対策の世界的な権威。

**Ha-cheong Yeon (韓国)**

ソウルの韓国開発研究所の研究員。Yonsei 大学で経済学を学ぶ。ニューヨーク市立大学で経済学博士取得。韓国厚生省のコンサルタント。1984-85年 Takemi Fellow。

**S. W. R. de A. Samarasinghe (スリランカ)**

スリランカの Peradeniya 大学の経済学部講師。Ceylon 大学で経済学を学んだ後に 英国 Cambridge 大学で経済学博士取得。1985-86年 Takemi Fellow。

**丸井英二 (日本)**

東京大学医学部国際交流室講師。東京大学医学部保健学科を卒業後、疫学で保健学博士を取得。1986-1987年 Takemi Fellow。

**Eustace P. Y. Muhondwa (タンザニア)**

Dar es Salaam 大学 Muhimbili 医学センター 行動科学部門長 講師。Dar es Salaam 大学で社会学を学んだ後、英国 Nottingham 大学で地域医療学で博士取得。1987-88年 Takemi Fellow。

**Prakash Chandra Gupta (インド)**

ボンベイの Tata 基礎科学研究所研究員。Holkar 科学大学で統計学を学ぶ。Bombay 大学で修士課程を修了後、Johns Hopkins 大学で疫学研究、博士号取得。1984-85年 Takemi Fellow。

**Uriel Dan Kitron (イスラエル)**

イリノイ大学獣医学部獣疫学助教授。Hebrew 大学で生物学を学んだ後、カリフォルニア大学で生物学博士。1985-86年 Takemi Fellow。

**Charles M. Good (米国)**

Virginia 州立大学地理学教授。Trenton 州立大学で地理学を学んだ後、Chicago 大学で博士号取得。1986-87年 Takemi Fellow

**Emmanuel Max (インド)**

Madras 大学計量経済学主任。Madras 大学で数学を学ぶ。Madurai 大学で数理経済学博士。1987-88年 Takemi Fellow。

**Vulimiri Ramalingaswami (インド)**

現在は UNICEF の特別顧問。ハーバード大学公衆衛生学部客員教授。1979年インド科学アカデミー会長。その後、WHOの医学研究委員会委員長。Andra 大学医学部卒。

**岩井誠三 (日本)**

神戸大学国際医学研究交流センター長。麻酔学教授。1979-1983神戸大学医学部長。

**Lee M. Howard (米国)**

Johns Hopkins 大学医学部卒。同大学で 公衆衛生学博士。国際保健の専門家。インドにおけるマラリアの臨床、USAIDの職員としてフィリピン政府の顧問、WHOのPAHOにおける資源開発部長などを歴任。

**我妻 堯 (日本)**

国立医療センター国際医療協力部長。1956年東京大学医学部卒。東京大学医学部産婦人科学助教授を経て現職。

**大瀬貴光 (日本)**

前熱帯医学協会顧問。慶応大学医学部卒。台湾大学医学部公衆衛生学教授、広島放射能影響研究所寄生虫部長の後、国際連合アフリカ経済委員会顧問、WHOアフリカ事務局顧問などを歴任。

**Russell Morgan (米国)**

米国国際保健協会事務局長

**F. H. Abed (バングラデシュ)**

バングラデシュ地域開発委員会委員長。Glasgow 大学で B. Sc. 取得。1981年 Magsaysay 賞を与えら

れる。

**星野昌子 (日本)**

日本の国際ボランティアセンターの設立以来の事務局長。慶応大学で社会学を学ぶ。Laos, Thailand に18年滞在。

**中根千枝 (日本)**

東京大学東洋文化研究所名誉教授。東京大学で東洋史を学んだ後、ロンドン大学で社会人類学を研究。社会人類学およびチベット史を専攻。

**中嶋 宏 (日本)**

現在WHO事務局長。東京医科大学卒。フランスへ留学、精神医学を専攻。WHOの職員となり、1979年西太平洋支局事務局長。1988年事務局長になる。

**Julia Chang Bloch (米国)**

1987年以来 USAID アジア部門次長。1967年ハーバード大学で東アジア地域学で修士。その後USAIDで協力事業に専念する。

**John R. Evans (カナダ)**

現在開発のための保健委員会委員長。1952年 Toronto 大学医学部卒。McMaster 大学医学部長、Toronto 大学長を歴任した後に、世界銀行に入って活躍。

**近藤健文 (日本)**

国際協力事業団医療協力部長。慶応大学卒業後厚生省に入る。統計情報部、母子保健課などを経て現職。

**David E. Bell (米国)**

ハーバード大学公衆衛生大学院教授・人口研究部長。ハーバード大学で経済学を専攻。1951-53年 Truman 大統領の顧問。1966年 Ford 財団の国際副部長などを歴任。

**蟻田 功 (日本)**

現在国立熊本病院長。熊本大学医学部卒。厚生省を経て、1962年WHOに入り、天然痘撲滅のプロジェクトに参加。その後その最高責任者になり、1980年にはその撲滅宣言をした。1988年 Japan Prize 他多くの賞を受ける。

**Lincon C. Chen (米国)**

ハーバード大学公衆衛生大学院武見記念国際保健教授。Takemi Program の責任者。中国に生まれ、その後米国へ帰化。ハーバード大学医学部卒。Johns Hopkins 大学で公衆衛生学 MPH 取得。インド、バングラデシュで国際保健を17年間にわたり実践し、その後現職。

**金子義徳 (日本)**

東邦大学医学部名誉教授。東京大学医学部卒。伝染病研究所などを経て東邦大学公衆衛生学教授。退職後、JICAのフィリピンにおける熱帯医学研究所のチームリーダーとして、5年間にわたりこのプロジェクトを指導。

**大熊由紀子 (日本)**

朝日新聞論説委員。東京大学教養学部教養学科卒。その後朝日新聞社に入り、医学、科学分野を扱う。

●ポスト・コンGRES・ツアー/第1回武見講座リユニオン・ツアー

岩手への小旅行

1. 旅程

シンポジウム終了後の1988年7月4日から5日にかけて、岩手県沢内村他を訪れた。

往復は東北新幹線を利用した。宿泊は湯田町の湯本ホテルで2人1部屋の和室だった。



大来佐武郎組織委員会  
委員長



山村雄一ハーバード  
日本委員会委員長



シンポジウム会場風景



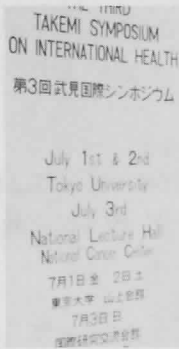
中嶋 宏 WHO事務局長



一般公開講演会 壇上の演者達



Lincoln C. Chen 武見記念教授



シンポジウムに出席した各期武見フェローの面々



沢内村国保沢内病院



懇親会 於(財)生存科学研究所

## 2. 参加者

武見フェローのリユニオン(再会)ツアーということで、シンポジウムに参加したフェローのうち、日程の都合のついた者が参加した。

M. R. Reich	ハーバード武見講座助教授
P. Gupta	1984-85 武見フェロー
U. Kitron	1985-86 武見フェロー
C. Good	1986-87 武見フェロー
丸井英二	1986-87 武見フェロー
K. Phonboon	1986-87 武見フェロー
E. Max	1987-88 武見フェロー
L. Good	元武見講座秘書、Good夫人
M. Minacapelli	武見講座秘書
杉田 聡	シンポジウム事務局、東大大学院生
春日 常	シンポジウム事務局、東大医学部国際交流室

## 3. 1日目

参加者は前夜は山上会館とガーデンパレスホテルに宿泊していたので、それぞれタクシーで上野駅に向かい、新幹線ホームで合流した。8:44発の列車だったので朝食は車内で自由にとることにした。2人がけの席で縦に並ぶように指定席がとれていたが、あまり混んでいなかったの空いている窓際の席に移る者もいた。大宮駅で事務局の長谷川さん(東大大学院生)がドーナツとアイスクリームを差入れてくれた。気を利かせて、Bostonと書かれたものを選んで来たので皆喜んでた。(武見講座はBostonの校舎にある。)

盛岡駅で岩手県庁環境保健部医務課の長山氏と鈴木氏が出迎えて、マイクロバスで盛岡手づくり村に向かった。手づくり村の会議室で郷土料理を中心とした食事を用意し、第1回武見フェローの田中慶司氏(岩手県庁環境保健部長)が議会の合間を縫って待っていてくれた。参加者が改めて自己紹介をし、和やかに歓談した。昼食後は手づくり村を見学した。Good夫人がピーナツ煎餅を自分で焼いたり、集合写真を撮ったりした。見学の途中で田中氏のお嬢さん(東京外語大学生)も合流し、翌日まで行動を共にした。

再びバスで沢内村国保沢内病院を訪れた。増田院

長から、老人医療費を無料にした経緯などの説明を受け、村の保健医療活動を紹介した20年前の8ミリフィルムを見た。増田院長の話はReich先生が通訳したが、8ミリフィルムには英語のナレーションが入っていた。その後院内を見学し、ICカードによる医療情報管理の実際を見た。

ホテルに向かう途中で小高い山にある碧祥寺に立ち寄った。

ホテルに着いた後、夕食までに大浴場で温泉につき、浴衣を着て食事に来る者がほとんどだった。畳の上にあぐらをかき、お膳に山と盛られた和食を珍しそうに味わっていた。

1つ1つの材料を尋ねられ、杉田氏は説明に四苦八苦していた。食事が終わり部屋に戻ろうとすると、隣の部屋で宴会をしていた人たちに呼び止められ、ついには笠をかぶり刀をさして一緒に踊らされてしまった。日本的な宴会風景を見て、皆面白がっていたようだった。

## 4. 2日目

北上保健所で地域の栄養指導員養成のための講習を見学し、貧血予防の工夫をした食事を試食した。

その後漬物工場で社長自らが揚げたてんぶらを中心とした昼食をとり、工場見学をした。塩分を控え、レモンなどで味付けをしていることや厳選した材料を使っていることなどの説明を受けた。

新花巻駅でおみやげを買い、14:18発の新幹線で上野に戻った。車内でシンポジウム及び旅行の感想文を書くよう、Reich先生から指示があった。Kitron氏は直接日光へいくため、宇都宮で下車した。他の人たちは上野駅で解散し、それぞれの宿舎に向かった。

## 5. おわりに

1泊2日ではあったが、天候に恵まれ、内容が盛り沢山の旅行だった。スケジュールを組み、案内役をして下さった、岩手県庁の長山氏と鈴木氏には心から感謝したい。特に菜食主義者である Gupta氏のために細かい配慮をしていただき、全員が満足できる旅行となった。

## 参加した武見フェローの反響（翻訳）

このシンポジウムに参加した武見フェローの人々から感想文が寄せられており、ここに掲載する。

マイケル・ライシュ（武見講座 事務局長）

第3回武見国際シンポジウムは、武見講座にいくつかの重要な発展をもたらした。シンポジウムでは、貧しい国々の健康状態を改善するための問題、成功、そして政策を論議するために、世界中から重要な専門家が集まった。この分野の日本人専門家の積極的な参加が討議をさらに一歩進めるのに貢献した。この面だけでもシンポジウムは成功だった。

偶然に、このシンポジウムは日本の2つの大きな出来事と重なった。中嶋宏氏の次期WHO事務局長への選出と、今後5年間の日本からの開発援助資金を倍増するという発表である。これらの出来事は日本、そして世界において、武見シンポジウムでの論議をさらに意義深いものとした。このようにこのシンポジウムは、開発途上国における保健医療協力に関する政策を再定義するための日本の努力に貢献したことだろう。このシンポジウムにおいて、武見講座には、4年前に東京で開かれた第1回の武見シンポジウムで述べられた武見先生の考えである「国境を越えた健康」という目的を達成しつつ、日本が国際保健医療の重要な問題に関して、地球規模の共同体に昇格するのを助ける機会が与えられた。

武見シンポジウムのもう1つの中心的な特徴としては、8人の元武見フェローの卓越した発表と、2人のフェローの聴衆としての参加である。彼らの発表と論文は、国際協力に関する問題と予見の実質的な例と鋭い分析を論議に加えた。彼らは、武見講座を通じての日本とのつながりへの賛辞と同時に、武見太郎先生の哲学に対する敏感さを披露した。武見先生が心に描いていたように、武見講座の中心的目的の1つを達成しつつ、毎年武見フェローの国際ネットワークは広がっている。

以下に述べられている武見フェローの感想でくり返されている通り、生存科学研究所の支援には大変感謝しています。大来佐武郎先生と組織委員会は、

開原成允東大教授の有能な先導により、シンポジウムに方向性と卓越性を与えた。特に日本人の元武見フェローの献身的な支援に感謝します：丸井英二先生（1986—87）にはシンポジウムの組織の運営に対し、田中慶司先生（1984—85）には岩手への小旅行の援助に対し、そして藤井充先生（1985—86）にはシンポジウムへの参加と武見フェローの訪問のお世話に対して。

第3回武見シンポジウムは、内容、組織、そしてもてなしに関して高い水準を満たした。私達は1990年のボストンでの第4回武見シンポジウムでお返しができるように最善を尽くします。

ブラカッシュ・グプタ（武見フェロー 1984—85）

今回武見シンポジウムに初めて参加したが、よく組織されていて、重要な教育的経験だと思った。他の武見フェローと会ったことが最も楽しかった。多くは初対面だった。事実、国際保健医療に関する科学的意見の定期的交換のため、今回のようなフェローの集まりを組織する試みがなされるべきだというのが、フェロー達の一致した提案である。

岩手への小旅行は実りあるものだった。日本人のヘルスケア・システムの働きに関して、その一端を見せてくれた。特に沢内村での、早期スクリーニングと予防の強調が印象的だった。その他、この小旅行は、日本人の親切なもてなしを受けたり、東京から離れた地方の風景をかいま見たり、気楽な雰囲気の中で他の武見フェロー達と交流する機会を与えてくれた。第3回武見シンポジウムを成功させたすべての組織と個人に心から感謝の意を表します。

ウリエル・キトン（武見フェロー 1985—86）

第3回武見国際シンポジウム「開発途上国への国際保健医療協力」は、日本とアメリカの科学者や政策決定者を集め、「生存」の言葉と武見先生の遺志に基き、重要な問題の多様性を分析する、独自の、そして時期を得た機会を与えた。シンポジウムでの発表と議論が、日本の海外援助の増加への着手に対する支援を約束したことと思う。私は参加して論文を

発表したこと、そして刺激的な発表や議論を聴く機会を持ったことを大変嬉しく思っている。シンポジウムの優秀な準備に対し、生存科学研究所、組織委員会、東京大学、そして武見フェローの丸井先生に感謝します。

武見フェローの再会ツアーでは活動中の日本の2つのヘルスケア・システムの例を見ることができた。沢内村の病院と保健所の見学はこの有名で刺激的な成功物語を現実のものにした。北上保健所への訪問では予防的健康増進、スクリーニング、そして栄養強化プログラムのために使われている方法の実際を見た。教育的な栄養指導の実際を見るのは大変面白かった。手工芸センター、漬物工場、そして温泉への訪問も日本をより理解するために役立った。田中慶司先生、組織委員会、そして生存科学研究所に対し、この旅行を可能にしてくれたことを感謝します。

### カンチャナサク・ポンブーン

(武見フェロー 1986—87)

このシンポジウムは、国際保健医療や武見哲学に関わる人々を一堂に集めた大きな催しであった。この会合に参加したことは特別な名誉だった。このシンポジウムは保健医療協力に対する知識と理解を深めてくれた。その上、日本の指導的な公衆衛生の専門家から多くを学んだ。特に第3世界の健康状態を改善するための決意に刺激された。

岩手への小旅行は、日本の地方の保健機関がどんな働きをし、どのように活動をを進めているのかを観察する良い機会だった。生存科学研究所、東大医学部国際交流室、そして岩手県環境保健部の暖かい歓迎もてなしに感謝いたします。1992年の日本での次のシンポジウムとこの素敵な国を再び訪れる機会を楽しみにしています。

### エマニュエル・マックス

(武見フェロー 1987—88)

第3回武見シンポジウムに参加したことと、日本とオーストラリアの優秀な科学者達と討議したことは、私に知的幸福としての重要な衝撃を与えた。私は日本人と、人間の発展に対する彼らの有効な取り組みを、非常に賞賛している。生存科学研究所の賞賛すべき目的とプログラムは、インドのハンセン病

患者と、危機に直面している共同体のためのハンセン病コントロールプログラムの恩恵を最大にする過程を支援する、という私の今後の研究努力に対し、連想と誘導の大きな源となった。研究所が私に、シンポジウムにおいて様々な機会を与えて下さったことに最も感謝します。私は今、インドのハンセン病コントロールの中で武見哲学を実践しようとするために働くことを決意している。

### チャールズ・グッド (武見フェロー 1986—87)

第3回武見シンポジウムは素晴らしいものだった。1つには、第3世界のヘルスケアの発展に対する日本の期待通りの貢献と日本自体のヘルスケア・システムについて学べたからである。シンポジウムのもう1つの顕著な特徴は、武見フェローの再会であった。シンポジウムは私達が連絡をとり続け、世界の多くの地域でヘルスケア・システムの発展の研究に関わり続けるための良い機会を提供してくれた。

岩手への小旅行は日本への多くの重要な洞察を与えた。日本のヘルスケアの提供、健康問題、社会組織、そしてライフスタイル。田中慶司先生と彼の部下のおかげで、旅行は非常に良く組まれて実施された。

第3回武見シンポジウムを組織するのに関わった人達はその努力に対し、高い評価を受けるに値する。あらゆる場面での素晴らしいもてなしを決して忘れない。またシンポジウムに参加して本当に良かった。もしできれば全員をヴァージニアの私達夫婦のところに招待したい。

### メアリー アン・ミナカベリ

(武見講座 事務局補佐)

第3回武見国際シンポジウムに参加できて本当に良かったと思っています。第1に、私が1年前に武見講座で働き始めて以来、ファクシミリで連絡をとり合っていた楠本陽子さんにお目にかかれて喜んでいます。東京の生存研を訪れてスタッフの皆さんにお会いすることを楽しみにしていました。楠本さん、佐々木さん、千葉さんにお会いするのはとても素敵な経験でした。そして、私達は生存研と武見講座の活動を調整するための、私的な、そして公的なつながりが持てたと信じています。

2つめに、そして重要なことには、私が武見シンポジウムに参加し、組織委員会や、特に事務局でスタッフに会い、一緒に働けたことです。今ではシンポジウムを組織するための過程に関してはっきりした考えを持ち、1990年のボストンでの第4回武見シンポジウムにおけるそれらの活動を楽しみにしています。

3つめは、シンポジウムでの発表を聞いてみて、特に武見フェローの発表で、私は開発途上国での国際保健医療協力の重要性をより強く認識しました。武見フェローに会うことは、そのうちの数人は初対面だったので、私が武見講座でやっている仕事にと

って非常に重要でした。グループは旧交を新たにしたり、新しい面識を持つたりすることができ、特に岩手への小旅行は有意義でした。

第3回武見シンポジウムは私にとって忘れられない思い出となるでしょう。素敵な思い出と、日本で築いた特別の友情を持って東京を離れます。すぐに戻りたいと思っています。生存科学研究所、武見御一家、そして東京大学のもてなしを特別に賞賛しています。私をこの重要な催しに参加させてくれた、マイケル・ライシュ先生と丸井英二先生に感謝したいと思います。

## ジャーナリズムの反響

今回のシンポジウムは、テーマが社会的な関心を引くものであったこともあり、一般ジャーナリズムにもとりあげられた。

その主要なものは、別表のようであるが、中でも朝日新聞の社説はこの問題をよく理解して書かれたものであり、国際医療協力の関心を持つ人々から感謝された。「日本の医学を世界のために」と題された社説の論旨は次のようなものである。「開発途上国では、いまなお3人に1人は5歳にならないうちにこの世を去る。その大半が死なずにすむ病気である。こうした国に人たちのために日本は何ができるのか、何をなすべきなのか、3日間にわたって東京で開かれた国際シンポジウム「開発途上国への国際保健医療協力」では各国の専門家から日本への注文が相次いだ。厳しい注文は大きな期待の裏返しでもある。日本の国際協力は、いま発想と政策の転換を迫られている。

第1にプロジェクト主義からプログラム主義への

転換、第2に治療中心から予防活動、保健活動中心への転換、第3は物の援助から人材育成重視への転換、第4は我国にその病気がなくなったからといって、我国の知的財産をつぶしてはならない。

竹下首相は「世界への貢献」の3本柱の一つとして今後5年間のODA総額を過去五年間の倍の500億ドル以上にすると先月発表し各国に注目されている。この7月21日にはWHOの事務局長として初のアジア人である中嶋宏氏が就任するが、この選出も日本対する途上国の期待のあらわれである。実のある国際協力を築かねばならない。」

昭和63年7月2日 NHK 7時のニュース

7月4日 朝日新聞社説

7月9日 医事新報

8月 医学界新聞

8月 医学のあゆみ

予定 開発ジャーナル(特集号)

## 武見シンポジウムこぼれ話

この武見シンポジウムの実行委員長を務めるようにとの御依頼を小平専務理事から受けたのは、昨年秋頃であったと思う。その時は、大変名誉に思うと共に、正直なと気が重かった。それは、このシンポジウムが生存研究所にとって大変重要な行事で

シンポジウム実行委員長 開原成允

あり、また、第1回のシンポジウムは、武見太郎先生がお亡くなりになって比較的すぐ行なわれたこともあり、人々の心に永久に残るものとなっている。それに続くものとしては、どのようなものにしたらよいのか見当もつかなかったからである。



ここに、シンポジウムを終わって、「大変よかった」という一般の評価をいただいたようでほっとしているが、そのような評価をいただいたのは、多くの幸運が重なったからであると思う。この一つが欠けても、このシンポジウムはできなかつた。ここに、これらのことを記録に留めて今後のシンポジウムのための参考に供したいと思う。

### シンポジウムのテーマ

今回のテーマとしては、「開発途上国への保健医療協力」をとりあげた。このテーマは既に述べたように非常に時期を得たものとなったが、このことは最初から予想していたことではなかつた。このテーマは、そういうと生存科学研究所の皆様から残念がられるかも知れないが、実はハーバード側から提案されたものである。昨年の夏に薬剤のシンポジウムがあった時に、このテーマについて予備的に話合ったが、私は、前からこうしたテーマの会合を持ちたいと思っていたので、これならきっと良いシンポジウムになると直感的に思った。

今年になって、中嶋宏先生のWHO事務局長就任、日本政府のODA予算の拡大などがあり、日本の医療関係者の間に国際協力に対する関心が急速に高まった。それにも拘らず、日本ではこれまで国際保健医療協力の問題を取り上げた学問的な会合は殆どなかつた。このシンポジウムは正にこうした時代の要請に答えるものになったのである。これはシンポジウムにとって大変有難い偶然であつた。

### 大来組織委員長

今回のシンポジウムが成功した大きな要素は、大来先生が組織委員長を引き受けてくださったことにある。大来先生は終始熱心に御指導下さり、また当日も殆ど全日会場であつて討論に加わって下さつた。私は大来先生が個人的にこれほど医療協力に関心を持って下さることに感激した。しかし、直接のご指導の他にも、大来先生が委員長の会合であるということで、このシンポジウムの意義が暗黙のうちに高まり、多くの方々喜んで御援助下さつた。この無形の恩恵は図り知れないものがあつた。

大来先生を組織委員長にお願いしようというのは、武見敬三先生の言いだしたことである。これには、

大来事務所に武見敬三先生の親しい友人である松岡さんがいたことも幸いした。それに、第2回のポストのシンポジウムに大来先生が参加しておられたので、それほど唐突ではないであろうとも思った。しかし、松岡さんははじめは、大来先生は忙しいからとても無理であろうということだつた。いずれにしても、一度お願いしてみようということで、いつであつたかはっきりは覚えていないが、武見敬三先生と一緒に大来事務所をお訪ねした。武見太郎先生のこと、国際協力の重要性を敬三先生と私が一方的に話すのを大来先生はじっと聞いておられたが、「わかりました。それほどいわれるならば引受けましょう。」と一言いわれた。この瞬間にこのシンポジウムの成功の大半が決まつたと思う。

### 中嶋宏先生と武見太郎先生

中嶋宏先生にこのシンポジウムに御参加いただくことは、最初から不可欠のことと誰もが思っていた。しかし、計画がはじまつた昨年の段階では、中嶋先生はWHOの事務局長の選挙に出られることは分つていたが、WHO西太平洋事務局長であつた。もし、本部の事務局長に選出されれば、それはすばらしいことではあるが、それに伴つて日程の調整が困難になることが予想された。

しかし、中嶋先生は様々な無理をこころよく聞いて下さつた。それは、1つには中嶋先生が武見太郎先生と親交が深かつたためである。私とReichさんで中嶋先生にお目にかかつた時に、中嶋先生は「ハーバード大学があるからこのシンポジウムに協力するのではありません。武見先生のシンポジウムだから協力するのです。」と言われた。Reich先生は一瞬答えに窮したようであつたことを覚えている。

### 日程調整

中嶋先生が本年の1月に、WHO事務局長に選出されたことによって、このシンポジウムの日程の調整は困難を極めた。最初は、秋の10月か11月に行う予定で準備を進めていた。しかし、中嶋先生は7月の半ばに正式に就任になるため、秋では到底日程がとれないことが判明した。

シンポジウムの日程は結局、大来先生、ハーバードのLincoln Chen先生、中嶋先生の日程調整の間

題になった。しかし、この3人は絶えず世界中を旅行しておられ、国際電話によっても連絡は仲々とれない。日程は2転3転し、そうこうしている内に、第1回の組織委員会を1月半ばに開くことになった。しかし、この時にはまだ肝腎の日程が決まっていないう失態になってしまった。結局中嶋先生の事務局長就任の前の方が「確実」ということになり、この7月をはじめの案がでてきたが、この日程では、大来先生がシンポジウム初日にまだ外国におられることになっていた。しかし、どうしてもこれ以外に日程がないということで、大来先生にお願いしようということになり、私が都合が悪かったので、代理に私のところの長瀬淑子さんに大来先生に会いにってもらった。長瀬さんはあとで聞くと決死の覚悟で行ったようであるが、こうした時に女性の力は大きく、大来先生は快くこの日程を了承して下さった。

この他にも、小さいことながら危機的状況はいくつかあった。これを切り抜けることができたのも、言わば潤滑油ようになって全体を和かにする才能を持つ長瀬さんに負うところが多かった。心から感謝する次第である。

#### 武見フェロー

今回のシンポジウムは武見フェローがあったからできたのであるということもできる。準備の実務の中心になったのは、東大の丸井先生であったが、丸井先生は今年1月まで武見フェローとしてハーバードに滞在していた。従って、ハーバードの事情もよくわかっていたし、またテーマも専門に一致していたこともあって、中心となって働いてもらった。また、シンポジウムの内容にも武見フェローが大きな役割を果たしたことは、別に述べた通りである。

また、ポストコンgressの旅行は、岩手県衛生部長の田中慶司先生が世話をして下さったが、田中先生は第1回の日本からの武見フェローであった。

この他にも武見フェローの指導者である Reich 先生が今年の1月から3月まで、別の要件で東京大学の客員助教授として日本に滞在されたことも、幸運であった。この間終始Reich 先生には準備を助けていただいた。英語の手紙の作成などは、いかになれていても日本人はやはり能率が悪い。Reich 先生には感謝の言葉あるのみである。

#### 手造りのシンポジウム

これまで書いたことから想像されるように、今回のシンポジウムは全て生存科学研究所や武見先生にゆかりのもので「手造りのシンポジウム」であったといえる。この程度の規模の学会になると、最近ではいわゆる「学会請負業者」に運営を頼むことが多い。しかし、費用を切り詰めたということもあって、当日の受け付けの一部に外部の人を頼んだが、それ以外は全て大学のいわば素人で運営した。シンポジウム会場や懇親会場も大学の中を借りたり、また2日目の懇親会は生存科学研究所で行ったため、このような費用は非常に安くなり、その分をシンポジウムの内容をよくすることに使うことができた。

もし、このために参加者に御不便をかけたとすれば申し訳ないが、雰囲気としては At Homeな会合になったと思っている。

#### 予算

以上いくつかシンポジウムにまつわる「こぼれ話」を書いたが、今回のシンポジウムの成功の最も重要な点は、財政的な基盤がしっかりしていたことである。通常、このようなシンポジウムの準備を引き受けるということは、「資金集めを含めて引き受けること」を意味することが多い。しかし、今回は小平専務理事は「資金の面では予算の範囲でやる限り心配しないでよい。」と言われた。これも、小平専務理事を中心として生存科学研究所がその財政的な基盤を確立してこられたから可能であったのであり、準備するものにとってこれ程ありがたいことはなかった。幸い、予算の範囲も越えなかった。

このような意義あるシンポジウムのお手伝いをさせていただき、今は感謝の気持ち一杯である。お世話になった武見太郎先生が少しでもこの成果を喜んでいただければと願っている。

(特集文責 関原成允)

●第40回生存科学研究会—生存科学研究所研究報告

「科学と人間」の会議—科学技術と人間の問題

上智大学生命科学研究所所長・生存科学研究所理事 青木 清

本稿は、7月16日に開催された第40回生存科学研究会で発表された生存科学研究所研究活動報告の抄録である。

\* \* \* \*

「科学と人間」の会議は、藤井隆生存科学研究所副理事長を世話人代表として、科学技術庁からの受託研究の調査研究における活動として組織された10名の委員から構成されたものである。本会議は各委員自由な立場で、今日科学技術の時代にあって何が問題で、どの様なことを行い、将来に対してどんなことを考えておかねばならないかについて話し合うことである。それが故武見太郎先生の言うところの「生存の理法」について考えることでもあると思われる。

こうして第1回の会議が渡辺慧委員の話題提供で始められた。渡辺委員は「原爆と平和」を例にして、人間の体験した科学技術の大きな問題であることを述べた。原子爆弾の投下によって生じた残酷な結果を見て、「科学者は罪を知った」という言葉が有名な科学者から述べられたが、それは科学技術と人間の問題として本質を述べたものではない。科学の進

歩は人間によるもので、人間の罪というものが原子爆弾を作ったから罪をおかしたというのではなく、科学の持っている業というものである。人間が科学技術を進めているかぎり、そこには常に仏教で言うところの業は存在することを知らなければならない。人間の生存にとって科学技術は平和をもたらす一方では罪をもおかすのである。そこに人間が考えねばならない深い問題がある。

以上のような話題を中心として各委員の自由討議が行われた。このような会議形式で10回、岡本道雄委員を座長として行った。その概略は、これまで生存科学研究所ニュースに載せてきたのでお読みいただければ幸いである。

科学技術と人間の問題として考えておかななくてはならないことは、有限の地球における人口問題である。医学医療が人間の生存の意思に科学的技術的援助を与える使命にあるというなら、その目的を果さなければならない。ところが今日の医学医療の発展には、疑問を抱かざるを得ない。それは故武見太郎先生の言う「生存の理法」にかなうものであろうか。

●第40回生存科学研究会—「生存の質」シリーズII

開発途上国の環境問題を通して考える生存と生活

第40回生存科学研究会にて滋賀県琵琶湖研究所専門研究員 中村正久先生から「生存の質」シリーズIIの標記講演が行われた。その

概要は以下のとおり。

\* \* \* \*

私が昭和61年現職に就く以前、WHO西大

平洋地域環境センター専門官として6年間、実際に途上国へ行って政府の人と共同で環境と衛生問題に取り組んできた経験を踏まえてお話しする。

世界的な環境問題は、人口増加を基盤とした天然資源の需要増大が背景となっており、アジアでは砂漠化傾向、熱帯雨林の減少、南支那海の汚染が挙げられる。基本的には環境衛生問題は、①改善努力が追いつかない、②富の分極化の進行であろう。

日本でも開発途上国の環境問題に対する関心が高まり、1989年には経済援助額は世界第1位になる予定で、現在までそれなりの効果も挙げている。

開発途上国の環境問題の展開をどうとらえるべきかについて、まず開発途上国特有の状況、すなわち貧困の文化、不安定な政情、若者の鋭い問題意識を日本の現状に重ねて考えてみる。そこから生存意識の問題を考えられないだろうか。それを考えるために、経済、社会、環境の観点から整理して言及した。

考察として①生存の中には生活という意味あいを含んでおり、生活の中には生存の概念がある。②生存という概念は社会システムの変化や社会システム形成の経緯によって異なる。

③生存はダイナミズムに対する抵抗か順応か。すなわち「積極的に生存する」のか「生存させられる」のか。④生存させられるという状況は変えられるのか。変えられないとしたら、社会の変化と速度は変えられるのか。⑤与えられた環境と生存の意識の関係は非常に強い。

最後に、開発途上国の環境問題を自分の問題として考えられるか。答えは「できない」である。従って、「できない」ことを出発点として援助を考えるべきである。

\* \* \* \*

討議では、経済生存、社会生存、環境生存の相互関係をどのように考えていくべきかに関して、演者と参加者の間で突っ込んだ意見の交換がなされた。また生存という言葉に関しても、時間概念を含む「存」と人間の意思という概念を含む「生」を結びつけたものと理解することによって、人間にとって深い意味を持つ「生存」という言葉になるのではないかとの意見に対し、演者は生存をきちっと定義するのではなく、混沌とした中に模索していくプロセスが重要ではないかと回答するなど、生存の本質に迫る活発な討議が予定時間を超えてなされた。

### ●生存科学ビューポイント

## 「生命体」の英訳

昭和56年頃の武見会長の言葉に、「生命体」があり、英語ではどう訳すか、という話題があった。最近英語専門家に尋ねたところ、LifeやLiveなどにこだわらない方が解り易いのではないかとして、「Creature」を挙げた。早

三枝外科院長 三枝 靖夫  
速辞書に取り組んでみた。生命のあるもの、生物 (Living being)、animate being、物、人、動物、隷属者、そしてクロスワードパズル辞典には、outer spaceとしてalienがあった。エイリアンとは異星人。武見会長が発語

してから2年後には、連続テレビドラマの中で、宇宙から生命体が地球にやってきた、と視聴率を高めていた。しかも地の精、空気の精、水の精これらみなCreatureだ。これぞ適訳に違いないと思った。そこで確信を抱いて、ヨミの国のあの人に報告してみた。あの方は原書の山の中から一冊を抜き出し、ページをめくり、視線を左右に走らせてから、「キミだめだよ」といった。聞きなれた言葉だ。そして「Creature」には、生物、無生物を問わず創造されたもの、被造物という第一義があるじゃないか。これでは世界の人々を納得せさ

ることはできないよ、といったようであった。

生命とは、外との境界膜、代謝機能、自己複製の三要素をもつ。個にしても群にしても原始有機物のチキンスープから生成されたものだ。幾千万年の適応の連続だった。従ってあの方の言葉を借りれば、「客観的状況の正しい把握と、自分自身の中にある自己環境を、どうやって適応させるか」、これが「生命体」の含意でなければならぬのではないかと思う。10年も経つと、あの方の言葉、新しい言葉は世界を駆け廻るのである。

#### ●第5回武見フェロー報告

### 武見記念国際保健講座を終えて

慶応義塾大学医学部衛生学・公衆衛生学教室 大前 和幸

1987年9月から1988年6月までの10ヶ月間、ハーバード公衆衛生大学院武見記念国際保健講座にて、見聞を広める貴重な機会が与えられましたことは、生存科学研究所の諸先生を初め、皆様の温かい御協力、御助力の賜物と感謝申し上げます。

第4回武見フェローは8名で、その氏名、出身地および専攻分野は、Emmanuel Max インド (Econometrics)、Eustace P. Muthondwa タンザニア (保健政策)、Asma Fozia Qureshi パキスタン (女性、小児保健)、Alberto S. Alzate コロンビア (マalaria学)、Allan Schapira モザンビーク (フェロー自身はデンマーク人、マalaria学)、Jonathan E. Myers 南アフリカ (産業衛生)、Ramesh S. Durvasula インド (産業衛生)、大前和幸、日本 (産業衛生) でした。それぞれ才能と経験豊かなフェロー達で、武見セミナ

ーでの意見交換以外に、他のDepartment主催のセミナーの講師や、武見フォーラムでのパネリストを務めるなど、活発に活動をしていました。2名のフェローが、本年7月の東京での武見シンポジウムの発表者であったことはご記憶のことと存じます。

個々には、南アフリカのフェロー夫妻に男児が誕生し、パキスタンの女性フェローが懐妊するなど、おめでたいことが続きました(この稿が印刷される頃には、彼女は既に愛児を得ていることでしょう)。

今学校年度の武見記念国際保健講座は、フラインバーグ公衆衛生大学院長の、「AIDSが理解できたら公衆衛生を理解したといっても過言ではない。なぜなら、AIDSは単に医学の問題ではなく、政治、経済、哲学、倫理、人間行動学、文化等の分野にまたがる総括的な問題だからだ。」という言葉で始まりました。

公衆衛生の裾野の広さを、十分考えさせられたOpening seminarでした。

私個人としましては、いままで殆ど知らなかった国際保健の様々な分野・様相を垣間見ることができました。

産業衛生・環境衛生関連で思い起こしてみましても、国際保健という枠組みの中での産業衛生の位置付け、日本の産業衛生・環境衛生の立場・直面している問題と、発展途上国におけるそれらとの非常に大きな隔たり、等過去には全く考えも及ばなかったことに直面し、戸惑いと興奮を感じました。

現在の日本では、労働災害および公害による健康障害のほとんどは、人災でありかつ防ぎうる、と考えられているがゆえに、産業衛生・環境衛生は公衆衛生分野の主要な柱となっています。管轄省庁として労働省と環境庁があり、医療保障も労働災害保険、公害健康被害救済法・補償法により、一般医療制度とは独立して整備されています。

これに対し発展途上国では、政治・経済全般の整備が十分とは言えないところが多く、公衆衛生分野でも、マラリアを初めとする感染症対策、貧栄養対策、母子対策、人口対策が最優先課題であり、産業衛生・環境衛生はそれらが済んだ後の問題、あるいは並行して

いるとしても優先順位は非常に低い問題、ということのようです。従って、同じ産業衛生・環境衛生という用語を使用していても、発展途上国の学者が想起するイメージと、現在の私のもっているイメージとが全く異なっていました。

このような日本および発展途上国の産業衛生・環境衛生の現況の中で、産業衛生・環境衛生面での、日本の援助とはどのようなものであるべきなのか、というのが、帰国前の私の疑問でした。援助のFinal goalが、「被援助国が、将来、経済的・人的に、自力で自国の産業衛生・環境衛生関連の研究・教育・予防・治療システムを維持・運営・発展できるようにすること」であるとしたら、関連機器の援助も勿論必要ですが、第一には、発展途上国の産業衛生・環境衛生の、様々なレベルの専門家の養成・教育が、長期的に実施すべき無形の援助ではないか、と感じました。第二次世界大戦後、多くの日本人衛生学・公衆衛生学者が、アメリカ合衆国の公的・私的な経済援助でアメリカに留学し、今日の日本の産業衛生・環境衛生発展を担っていると同じことが、将来の発展途上国でも期待できるのではないのでしょうか。

## 維持会員だより

### 維持会員異動・寄付者のご紹介

(昭和63年6月1日～昭和63年7月31日)

#### 入会

##### ●個人

阿部 武臣 阿部内科医院院長  
高瀬 淨 高崎経済大学経済学部教授  
竹内 正 日本大学名誉教授・山梨医科

#### 大学名誉教授

林 宇一郎 公認会計士林宇一郎事務所  
三好 晃 日本光電東京株代表取締役社長  
牟田口道夫 国際親善交流協会会長

#### 寄付

##### ●法人

(社)通信機械工業会

株田村電気製作所	100,000円	蝶理(株)	20,000円
(社)日本貿易会		長瀬産業(株)	50,000円
伊藤忠商事(株)	740,000円	ニチメン(株)	170,000円
伊藤万(株)	60,000円	日商岩井(株)	420,000円
大倉商事(株)	10,000円	野崎産業(株)	10,000円
兼松江商(株)	140,000円	丸紅(株)	650,000円
川鉄商事(株)	70,000円	三井物産(株)	680,000円
金商又一(株)	10,000円	(社)日本建設業団体連合会	5,000,000円
興和(株)	10,000円	(社)不動産協会	2,000,000円
住友商事(株)	590,000円		

## ニュース・オブ・ニュース

### 研究所日報

- 7月1日 第3回武見国際シンポジウム
- 7月2日 同 第2日
- 7月3日 同 第3日 公開講演会
- 7月16日 第1回基本方針委員会
- 7月16日 昭和63年度第2回研究企画委員会

\* \* \* \*

### 第1回基本方針委員会

7月16日(土)午前10時30分から研究所会議室において第1回基本方針委員会が開催された。出席者は、両副理事長、専務理事、両常務理事、研究企画委員長、基金代表幹事の7名で、第3回武見国際シンポジウムの無事終了にともない、去る3月18日の昭和62年度第3回理事会で説明され議決された新たな基本方針にそって、今後の研究活動を進めることが再確認された。

そのほか、維持会員による継続寄付の目標額を3000万円とする長期計画を立て、募金目標の達成に向け全員で努力すること、生存科学研究成果を発表できる雑誌的なものを、来年度発行するよう検討を始めること等が決め

られた。

引き続きで開催された昭和63年度第2回(第6回)研究企画委員会では、基本方針委員会再確認された各基本的研究事業について協議がなされた。

\* \* \* \*

### W. レオンチェフ教授、生存研顧問に

投入産出分析の創始者として有名な経済学者、ノーベル賞受賞者である、ニューヨーク大学ワシリー・レオンチェフ教授は、7月26日付けの手紙で、生存科学研究所の顧問就任を受諾され、同時に氏の蔵書を研究所へ遺贈することを申し越された。

氏は、昭和56年、故武見太郎博士が主催した世界医師会の第3回「医療資源の開発と配分」に関するフォローアップ委員会に招かれて参加し、武見博士の思想に強い共感を持っていた。氏の開発した投入産出分析の手法は、経済一般からさらに健康問題を包括した総合的なものへと発展しつつある。健康を基盤とした健やかな生存を包括的に研究しようとする生存研にとって、極めて有力な協力者を得たことになる。また氏の蔵書は、投入産

出分析の世界的資料であり、地球的な視野からの研究の貴重な文献となろう。

\* \* \* \*

### 実践的地域包括医療の研究準備進捗

医療・保健・福祉の実践家、研究者、産業

を網羅して、包括的地域医療システムの実践的研究を行うべく、フィジビリティ・スタディのための研究会と、実践のための研究会との準備が、基金と研究所の連携プレーの形で着々と進んでいる。

## 公益信託武見記念生存科学研究基金ニュース

### 基金日報

- 6月25日 第1回メディコ・エコノミックス研究分科会
- 7月7日 第1回武見文献による生存の理法研究分科会
- 7月10日 第1回福祉概念の確認と実践的方法研究分科会
- 7月16日 第40回生存科学研究会
- 7月16日 第2回生命倫理の理念と科学的接近研究分科会
- 7月17日 第1回武見医政の理論と実証研究分科会
- 7月23日 第2回メディコ・エコノミックス研究分科会
- 7月23日 第1回健康の最小単位としての家庭研究分科会
- 8月27日 第3回健康投資と地域医療の展開研究分科会

\* \* \* \*

### 昭和63年度第1回表彰助成委員会

公益信託武見記念生存科学研究基金は、昭和62年から、生存科学の研究や実践に顕著な業績を挙げた方へ「武見記念賞」を、創造的研究、献身的実践活動を行っている方へ「生存科学研究武見記念奨励賞」を贈呈することとしており、昨年度は土屋健三郎氏、H.H.ハイアット氏の2名に「武見記念賞」を贈っている。

6月24日開催された表彰助成委員会において、今年度は「生存科学研究武見奨励賞」を贈呈する方針が決定された。

\* \* \* \*

### 第40回生存科学研究会

7月16日(土)午後2時から、大手町経団連ビル901号室で30数名の会員の参加を得て、第40回生存科学研究会が開催された。

今回は、生存の質シリーズIIとして、「開発途上国の環境問題を通して考える生存と生活」と題した中村正久先生(琵琶湖研究所専門研究員)の講演と「人類の生存における科学技術の役割—科学と人間の会議報告から」と題した、青木清先生(上智大学生命科学研究所所長)の報告がなされた。(内容は本文にて紹介)

### 新規加入生存科学研究会員

阿部武臣	太田幹二	高瀬 淨
竹内 正	三好 晃	師岡孝次

\* \* \* \*

### 各種研究分科会

前号紹介以後も次々と研究分科会が活動を開始したが、以下にそのメンバーを紹介する。

#### [メディコ・エコノミックス研究分科会]

世話人 江見 康一

#### 会 員

上原 鳴夫	遠藤 勲	小川 春男
加藤 邦夫	草野 洋一	香月祥太郎



佐藤貴一郎 鈴木 雪夫 関口 光正  
 高瀬 淨 田村 貞雄 田中 滋  
 筑井 甚吉 時子山ひろみ 中里 正典  
 藤野 志朗 細谷 英吉 師岡 孝次  
 我妻 堯

[武見文献による生存の理法研究分科会]

世話人 藤川 正信

会 員

青木 清 安達 幹郎 梅田 博道  
 亀井康一郎 小泉 英明 高橋由美子  
 中里 正典 永井 宏 J. マシア  
 山本 幹夫 笠貫 宏

[福祉概念の確認と実践的方法研究分科会]

世話人 豊川 裕之

会 員

伊藤 秋子 大久保修吉 大瀬 貴光  
 小川 春男 久保まち子 小泉 明  
 河野 裕明 佐藤 智 高石 昌弘

戸沼 幸市 原 ひろ子 日暮 真  
 藤井 義顕 舟久保熙康 逸見 武光

[武見医政の理論と実証研究分科会]

世話人 山口 正民

会 員

太田 幹二 奥村 集 小松 真  
 高田 勗 田島 達郎 中村 賢  
 蓮田 清 馬場 甫 馬場 賢一  
 丸井 英二 水野 貴夫 吉田 信

[健康の最小単位として家庭研究分科会]

世話人 小林 登

会 員

相澤 好治 安達 幹郎 有馬 弘毅  
 梅沢 勉 江川 充 小此木啓吾  
 小島謙四郎 小玉香津子 武見 敬三  
 永井 宏 長畑 正道 馬場 賢一  
 山岸 敦 横田俊一郎

ハーバード公衆衛生大学院武見講座だより

ハーバード公衆衛生大学院武見講座より、  
 ニュースが2つ届きました。1つは、創設以  
 来Executive directorとして同講座を終始、  
 多大な尽力によりリードしてきたライシュ博  
 士がDirectorに昇進し、引き続き同講座のと  
 りまとめをして下さるとのこと。2つ目は、  
 第5回武見フェローとして、以下の8名が決  
 定しました。9月末にはこのうち7名が、残  
 る1名は来年1月にボストン入りするそう  
 です。

Cai Jin-wen, China, M.D., Assistant Profes-  
 sor of Operations Research, Training Center of  
 Health Administration, Shanghai Medical Uni-  
 versity, : "Appropriate Utilization and Alloca-

tion of Health Resources: Discussion on the  
 Methods for Evaluation of Benefits of Invest-  
 ment" /Khor Geok Lin, Malaysia, Ph.D.,  
 Lecturer, University Pertanian Malaysia, :  
 "Using a Computer Simulation Model to  
 Improve the Interface Between Health Manage-  
 ment and Research" /Chinyelu Okafor,  
 Nigeria Ph. D., Head of Department and Senior  
 Lecturer, Department of Nursing Science, Uni-  
 versity of Nigeria, Enugu, : "A Study to Iden-  
 tify Factors that Affect Utilization of and  
 Compliance with Maternal and Child Health  
 Services in Nigeria" /Rukarangira Wa  
 Nkera, Nigeria D. M. V., Associate Director,

Zaire CONNAISSIDA Project, Zaire, : "Social Response to AIDS in Zaire and Appropriate Control Strategies" / 上原 鳴夫, 日本 M. D., Medical Officer, International Cooperation, National Medical Center Hospital, Tokyo, : "Evaluation of Medical Care in a Bolivian Hospital: A Case Study of International Cooperation" / Mukund Uplekar, India Dr. V. M., Researcher, The Foundation for Research in Community Health, Bombay, : "Epidemiologic Monitoring and Evaluation of the Impact of Health and Non-Health

Educational Inputs on Health Status of a Community in India" / Aurora Velazquez, Nicaragua M. D., M. P. H., Assistant Director of Occupational Health, Ministry of Health, : "The Managua Textile Workers Study: Occupational Health Program in Nicaragua" / Xu Xiping, China Ph. D., Department of Environmental Health, School of Public Health, Beijing Medical University, Beijing, : "Air Pollution and its Effects on Human Health in China"

#### ●予告

### 第41回生存科学研究会のお知らせ

第41回生存科学研究会は9月24日(土)午後2時から5時まで大手町経団連ビル9Fで行なわれます。テーマおよび演者は次のとおり。  
「生存の理法」の文献学的考察 / 図書館情

報大学学長 藤川正信先生。

「地域医療のあり方研究分科会の報告」 / 委員長 高田勗北里大学教授。分担報告者は梅園忠、中村賢、中山昌作の各氏。

#### ●予告

### 広島講演会のお知らせ

大阪、岡山に続く第3回国内講演会が、当研究所の法人維持会員である広島県医師会(会長杉本純雄)の後援で、10月に広島で開催されます。テーマは「明日を切り拓く地域医療」、多数のご来聴をお待ちしています。

日時: 10月15日(日) 午後2時~5時  
場所: 広島県医師会館(入場無料)

演題及び演者: 「医療環境」の変化に対応した地域医療の展開 北里大学医学部高田勗教授 / 「医療経済と社会保障の方向」 帝京大学経済学部江見康一教授

座長: 山口正民 日本プライマリケア学会  
長 コメントータ: 産業医科大学学長土屋健三郎 / 大阪大学筑井甚吉教授

### 編集後記

9月号は、第3回武見国際シンポジウムの特集を組みました。編集にあたり、シンポジウムの実行委員会の方々、特に開原先生に全面的な御協力を頂きました。御礼申し上げます。

来年度は、生存科学研究の雑誌が発行される予定で検討が始まりました。これまでのニュースでは、研究内容の紹介が十分で無いというご批判がありましたが、それに応えられるようになることでしょう。(N)